

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

—プルタルコスを中心に—

(VII)

『コリオレーナス』論（その一）

コリオラヌスとその時代

木 村 輝 平

オーフィディアス ……私がコライオリーズにおいて

お前がくすね取ったコリオレーナスの名を使い

お前を喜ばしてやと思っているのか。

（5幕6場88～99行）

(I)

ドイツの政治学者カール・シュミット (Carl Schmidt) はその著書『政治的なものの概念』 (*Der Begriff des Politischen*) の中で政治性の本質についておよそ次のような趣旨のことを述べている。すなわち、もし道德の領域においてその究極の区別が善と悪ということであり、美的な面においては美と醜、経済の面においては利と害とすると、政治の分野におけるそれは敵と味方ということだと言うのである。もちろん、彼が注意しているようにこれで政治的なものすべてが説明されてしまうというのではないが、彼の見方には政治の根本に対するきわめて鋭い、いわば目から鱗を落とすような洞察があるように思われる。

このような政治の見方からすると、今回取り上げる『コリオレーナス』というシェイクスピアのローマ史劇はまさに政治の本質を描いた劇と言えるであろう。たんに政治世界をテーマにしているということから言うと、シェイクスピア劇にはその数は多く、ローマ史劇や英国史劇などを筆頭に枚挙にいとまがないほどである。ただ、それらもれっきとした政治劇であることは確かであるが、この劇と較べるとどこか質の違いのようなものが感じられる。それは、言うならば、他の劇の場合、いわば政治の現象面を追っている感があるのに対し、『コリオレーナス』では政治の本質、政治の根本が集約的に表現されている趣きがあるというところであろうか。この劇のこうした性格は当然、主としてそのプロットに由来するものと考えられる。それ故、まずここで『コリオレーナス』の骨子を——ごく簡単にではあるが——紹介することにしたい。

コリオレーナスはコライオリーズ¹⁾の戦いでボルスキー人（またはボルサイ人）を超人的な働きで破り、その名を得た大英雄であるが、持前の傲慢と頑固さによって平民を敵に廻し、執政官になるどころか追放の憂き目に会う。彼はボルスキーのところへ行き、彼の仇敵でその指導者オーフィディアスと手を結ぶことに成功し、共にローマを攻めることになる。ボルスキー軍はローマ側を圧倒し、ローマにあと一步のところ迫るが、結局最後に、コリオレーナスは妻子と母親の嘆願に折れて、軍を撤退させる。そこで、彼に嫉妬を感じ始めていたオーフィディアスはこの機に乗じて彼を殺害する。

言うまでもなく、このストーリーはプルタルコスの『対比列伝』の中の「コリオラヌス伝」に基いており、細かい点では改変したところもあるが、上に紹介したような大筋では変っていない。伝記としてまとめられているのであるから実話に違いないと考えられるのであるが、²⁾しかし、いわばこれほどドラマティックな出来事や生涯が現実にあったことに驚かざるを得ない。ここにあるのはコリオレーナスという人物の運命の変転と没落といったものだが、それを生じせしめるのには正に敵・味方の軸であって、彼の軌跡そのものが政治とい

うものの寓話であると言っても言い過ぎではないであろう。こういうとこの話は何か知的なもののように聞こえるが、彼の運命の変転には怒り、悲しみ、喜びなど様々な人間感情が伴っており、情的な要素も濃厚である。また、この主人公のスケールの巨大さ、あるいは、この話が人の心に訴える力の深遠さ、こうしたことを考えると、この話を英雄叙事詩や神話に近いものとして捉えることもできよう。したがって、シェイクスピアは本来そうした劇的エネルギーを秘めたコリオラスの物語に注目し、それをうまく演劇にまとめたことで、まず十分評価されねばならないであろう。素朴な見方かも知れないが、『コリオレーナス』という劇の面白さはまず第一にこうした土台にあることを筆者としては強調しておきたい。

一般にこの劇はシェイクスピアの劇作品中にあっては、それほど高い評価を受けているとは言えないようである。それはたぶん、生々とした魅力ある登場人物が比較的少ないとか、劇の構成面で比較的平板であるとか、いわばシェイクスピア劇的特徴において物足りない点があるからではないかと思われる。しかし、こうした観点を離れて、一個の独立した劇として捉えた時、上に述べたような魅力、味わいによって正当に評価されることになるだろう。

このような魅力のある物語が格好の素材としてシェイクスピア以外の劇作家にも用いられているのは当然の成行きであろう。さすがにイギリスではシェイクスピアに張り合う体のものはあまりなく、シェイクスピアのものの改作物がいくつか目につく程度だが、他のヨーロッパの諸国ではかなりの数の劇がこの題材で書かれているようである。フランスなどはその筆頭であるが、その中で比較的早く書かれ、重要な作品として、アレクザンドル・アルディ(Alexandre Hardy)の『コリオラン』(*Coriolan*)がある。これは1625年に出版されているけれど、執筆は1600年前後と推定されており、同じくアミヨの訳を典拠にしながら、シェイクスピアのものより多少早くできたもののようである。もちろん、影響関係は認められない。

またコリオラヌスの話はいかにもオペラ好みの主題ではないかと思われるが、実際、17世紀半ば以降ヨーロッパ各地で上演されたようである。ただし、それらはシェイクスピアの作品に拠ったのではなく、フレデリック大王の筆によるとされる作品に基くことが多かったようである。オペラとは違うが、有名なベートーベン『コリオラン序曲』はハインリッヒ・フォン・コリン (Heinrich Von Collin) による悲劇『コリオラン』(1802年) に対して初演後数年して作曲されたものである。その動機となったのは別の作曲家がモーツアルトの曲を編曲してこの劇のために作った間奏曲をベートーベンが聞いたからであったという。

ところで、プルタルコスの『対比列伝』の中においては「コリオラヌス伝」と並置されている伝記はというと、それはアテネ出身の政治家・将軍であったアルキビアデス (Alcibiades) という人物の伝記である。二人の似た点として、アルキビアデスも祖国アテネを去り、敵国スパルタに仕えるようになり、アテネに対抗したことが挙げられる。しかし、アルキビアデスの場合は、もう一度アテネに戻りスパルタと闘い、さらにまたアテネを逃げ出すことになるという複雑な運命をたどる。人間としては、アルキビアデスの方は策略に富み、人心収攬も巧みで、政治家的才能に恵まれていたようで、コリオラヌスの場合とちょうど正反対のように思われる。因みに、この人物が『アセンズのタイモン』で祖国アテネを追放された後、武力でそれを陥落させる将軍アルシバイアディーズのモデルである。

(Ⅱ)

コリオラヌスの時代はローマ史の中でも非常に古い時期に属し、伝説や神話の時代に接していると言ってよいほどであろう。しかし、その大体の年代は、リウィウスの『ローマ史』の年代記的記述や彼の生涯中にあったとされる重要

な出来事などから定められないわけではない。すなわち、コリオラヌスは前6世紀初頭に生まれ、前5世紀末に活躍し、前487年頃先の話のような最期を迎えたものと思われる。³⁾ これはギリシャでは Marathon（前490年）、テルモピラエ、サラミス（いずれも前480年）などのペルシャ諸戦役があった頃とほぼ一致する。また、シェイクスピアの他のローマ史劇が扱っている大カエサル、アントニウス、小カエサルの時代と較べると、およそ400年も昔ということになる。

しかし実際は、プルタルコスの「コリオラヌス伝」を読んでも、なかなかこのような時代感覚が得られるものではない。『対比列伝』は物語中心の書き方で、年号を意識して述べることはほとんどなく、執政官の名前で示されても学者でもない限り参考にはならない。「コリオラヌス伝」の中にはローマ最後の王で放逐された例のタルクィヌスとの戦いや護民官制誕生の契機となった聖山事件への言及があり、よくよく注意していればその時代の古さを感じ取ることができるかも知れないが、普通には、この伝記を読んでこれをローマ史のどの時期に入れるのか、西洋古代史のどのあたりに位置するかについてはっきりした印象を持つのは難しい。

言うまでもなく、シェイクスピアの『コリオレーナス』の主要典拠は「コリオラヌス伝」であるが、今述べた理由からか、この劇ではいわゆるアナクロニズム（時代錯誤）が多く見られる。一般にシェイクスピアはアナクロニズムをあまり気にしていなかったらしく、多かれ少なかれ大体どの古代劇にも見受けられるのだが、特にこの劇ではそれが著しいことは確かである。

シェイクスピアのアナクロニズムということで、一番よく見受けられる型は、エリザベス朝当時の風俗が古い時代の劇の中にそのまま用いられるというものである。この劇においては、この種のものとして、“Doublet”（当時の男性用胴着）（1・5・7）と“Hat”（縁つき帽子）（2・3・105及び175）への言及がある。“Doublet”への言及は『ジュリアス・シーザー』の中にもある（1・2・267）のだが、ただしこの場合、素材として用いた「ユリウス・カエサル伝」の

ノース訳中にも“Doublet”という訳語が用いられている箇所があるという事情もあり、シェイクスピアだけの責任ではないかも知れない。“Hat”の場合は、あまりに明らかな錯誤を緩和すべく、ポープがこれを“Cap”（縁なし帽）と校訂してしまい、18世紀にはこれに倣った編者もかなりいたようである。

この劇でこうした風俗のアナクロニズム以上に著しいのが歴史的人物についてのアナクロニズムである。つまり、これは『コリオレーナス』の時代においては存在すべくもない後世の人物の名が劇中で言及されるような錯誤である。その典型的な例が2幕3場で護民官ブルータスがコリオレーナスの家系に言及し、それに含まれる著名人を挙げている箇所であろう。ここではほとんど人名のみが問題なのと、テキスト自体にも問題がある箇所なので、訳は省略して原文（特にここではニュー・アーデン版）のみを掲げることにする。

Brutus. …and what stock he springs of
 The noble house o'th' Martians: from whence come
 That Ancus Martius, Numa's daughter's son,
 Who after great Hostilius here was king;
 Of the same house *Publius* and *Quintus* were,
 That our best water brought by conduits hither;
 [And *Censorinus* that was so surnam'd]
 And nobly named so, twice being censor,
 Was his great ancestor.
 (2・3・235～243, イタリア体は筆者)

前半部に出ているアンカス・マーシャス (Ancus Martius)、ニューマ (Numa)、ホステリウス (Hostilius) という人物名はローマ古代の王政期の王様の名前なので、コリオレーナスの時代よりやや昔に属し、問題はない。次のパブリウス (Publius) とクィンタス (Quintus) の内、後者は実は Quintus Marcius Rex という人で、前144年に法務官 (Praetor) に就任し、その名を残すような水道を建

設しているのは、上の引用にもあるとおりである。パブリウスという人物はほぼ同時代の人物ではないかと思われる。したがって、この二人はコリオレーナスよりも300年以上後の人で、明らかなアナクロニズムの例である。次のセンソリナス (Censorinus) という人物は、本名は Caius Marcius Rutilus と言い、ここにあるように2度(前294年と前265年) 監察官 (Censor) になったことでこの通称を得ている。(因みに、それまでは同じ人が2度この地位に就いた例がなかったようである。) だから、この人も年代的にコリオレーナスより後世の人とわかるが、そもそも歴史学的には監察官という職務がローマに創設されたのはコリオレーナスの時代より少し後の、約前440年頃らしい。どうしてこのような大々的な(?) アナクロニズムが生まれたかであるが、これは間違いなくシェイクスピアの素材の借り方に問題があるようである。

ここの箇所は「コリオラヌス伝」冒頭部分(第1節)に基いているのだけど、それはプルタルコス解説でもあるので後世の人についての言及があっても別に不都合はない。ノースの訳は次のようになっている。⁴⁾

The house of the Martians at Rome was of the number of the Patricians, out of the which hath sprong many noble personages: whereof Ancus was one, King Numaes daughters sonne, who was king of Rome after Tullus Hostilius. Of the same house were Publius, and Quintus, who brought Rome their best water they had by conducts. Censorinus also came of that familie, that was so surnamed, bicause the people had chosen him Censor twice.

これを見るといかに忠実にシェイクスピアが「コリオラヌス伝」に付いていたかがわかるが、ただ、コリオレーナスの時代に生きるはずの劇中人物が同じことを言うと歴史(学)的には具合が悪いわけである。もっともこう書いたところで、歴史学者でも古典学者でもない普通の観客にとって何の問題もないところであろう。

ところで、「センソリナス」という上の人物名には実は本文校訂の問題が絡んでいる。というのは、上に掲げた原文の “[And Censorinus…surnam’d]” という行 (241行) は、鍵カッコが付されていることからわかるように、二折本原本には本来なかったものなのである。しかし、このままでは、残りの二行は意味をなさないで、先のノースの文章との比較によって欠落部分を補充する形で様々な校丁が編者によってなされてきた。それらはいわば大同小異で優劣の判断はきわめて難しいが、結局、ニュー・アーデン版、その他が採用しているデーリアス (Nikolaus Delius) の校訂が最有力のものに思われる。というのは、この校訂によれば、欠落部分はそっくり一行だけということになるし、またその、“Censorinus that was so surnamed” という表現はほぼ、そのままノース訳に呼応しているからである。

同じようなアナクロニズムでも、先程の例よりもっとよく知られた歴史上の人物に関してなされたものが、まだ二、三ある。まず、1幕4場でラーシャス (Lartius) がコリオレーナスの戦いぶりを讃えて、「そなたは正にケイトーの理想に適った武人ぶりだった……」 (Thou wast a soldier /Even to Cato's wish…) というところがある (1・4・56～57)。このケイトーというのは、その生活態度、また、監察官としての職務ぶりから「監察官」 (Censor) と呼ばれた大カトー (前234年—前149年) のことである。このせりふも実はプルタルコスの記事に基いていて、アナクロニズムの発生のメカニズムは先の場合と同じように考えられる。なお、ここの原文、‘Cato's wish’ のところは二折本では ‘Calves wish’ となっており、誤植によるものと思われる。これをシェイクスピアがアナクロニズムを回避するために意図的変更を加えたものとする説を立てる人もあるが、他の例なども考えると、これはやはり穿ち過ぎというものである。

この他にも、メネニウス (Menenius) という人物はガーレン (Galen) と、アレクサンダー大王に言及する (それぞれ、2・1・11と5・4・21～22)。ガーレンというのはローマ時代の名医で、中世からルネッサンスにおいても医学の権

威として名が知られた人で、シェイクスピアの他の作品にも何回か出てくる。しかし、この人は紀元後2世紀に活躍した人なので、かなり大幅なアナクロニズムがあることになる。また、アレクサンダー大王はかなり古い時代の人物に思えるが、コリオレーナスと較べればもちろん後世になり、コリオレーナスの死後130年くらい経て、誕生したという関係になる。これらはアナクロニズムとしてはかなり派手なものと言えよう。これをしゃべるメネシアスという人物がかなりひょうきんな人物として描かれていることが気になるが、ユーモア効果を狙って、意図的になされたアナクロニズムという見方は少し無理があろう。というのは、いくら自由闊達な筆をふるったシェイクスピアであっても、こういういわばSF的手法で面白さを狙うというのは、シェイクスピアの書き物全体から判断して、あり得ないことのように思われるからである。

(Ⅲ)

『コリオレーナス』の舞台となる場所はローマの他にボルスキー側のコライオリーズ (Corioles) とアンシャム (Antium) とがあるのだが、劇中この二つの都市の性格と関係はあまりはっきりしないくらいがある。そこで、この章ではこれらの都市に関係する事柄を多少検討することにしたい。

まず、その住人であったウォルスキー (Volsci) 人のことであるが、彼らはイタリアに定住するようになったことからイタリキと総称される、印欧語系の言葉話す人種の一派であった。ローマ人の属したラテン族も同じイタリキだが、言語的に見るとやや遠い親戚筋になるようである。ウォルスキー人は前6世紀頃中部イタリアからラティウム南部に進出し、前5世紀、4世紀にかけてローマと抗争を繰り返した。しかし、結局はローマに次第に屈服して行き、前304年頃までにはすべてのウォルスキーの町はローマに帰順し、やがてはその痕跡を残さぬほど完全にローマに同化してしまった。ラティウムに進出したウォル

スキーは必ずしも統一国家の体制を持っていたわけではなさそうで、都市国家の連合のような形がたぶん実態に近いのではないかと考えられる。ローマとの戦いにおいても必ずしも全部の町が足並を揃えたのではないようである。

このウォルスキー人達がラティウムで営んだ諸都市の中にコリオリ (Corioli) とアンティウム (Antium) があったわけである。コリオリはローマ南西わずか25キロにあった国境の町で、ローマに屈する以前は、プルタルコスによれば一大勢力をふるったらしい。なお、この名前はシェイクスピアの劇では二折本において誤植らしい箇所を除いて、⁵⁾ “Corioles” (コライオリーズ) という表記になっている。これは実はノースの綴りを踏襲したものであり、そのノースもアミヨの同じ表記を拠りどころとしている。だから、“Corioles” に根拠がないわけではないが、プルタルコスの他の版本や、リウィウスなどの他の史家の著作にも “Corioli” とあるので、こちらの方が正しいようである。テキストの上で “Corioles” を “Corioli” (コライオリ、コライオリイ、コリアリなど) とはじめて校訂したのはポープの見識によるものであったが、多数の編者はそこまではせず、“Corioles” を残している。

他方、アンティウムの町はローマの南東約50キロのところの都市で、ウォルスキー人がラティウムに移住してきて以来ずっとここが中心都市だったらしい。(また、ここは臨海の地であったため、後にローマに吸収されてからはリゾート地になり、ネロ、カリグラなどもここで誕生している。)

プルタルコスによるとローマがコリオリを攻めた時、カイウス・マルキウス (Caius Marcius, 後のコリオラス) の超人的働きによって、これを奪取し、援軍に来ていたアンシャム軍を打ち破ったことがあった。『コリオレーナス』の場合、その際のコライオリーズ軍とアンシャム軍の関係はあまりはっきりした印象を残さないが、よくせりふの端々に注意を払えばやはり上と同じ関係になっていることが理解されてくる。印象が明確でないのはたぶん、シェイクスピアがプルタルコスと違い、この戦いにタラス・オーフィディアス (Tullus

Aufidius)を登場させていて、⁶⁾ 複雑になっているからであろう。なかなかわかりづらいのだが、一幕全体から判断すると、オーフィディアスはアンシャム軍の指揮者というだけでなく、ボルスキー人全体の盟主として描かれているようである。しかし、この部分はシェイクスピアが自由に創作したというのは早計で、プルタルコスとは別の箇所での人物がウォルスキー人全体にとって王のような権威を持っていたこと、またコリオラヌスと戦場でしばしば闘ったことがあることなどを述べているので(「コリオラヌス伝」22節)、根拠のないことではないわけである。むしろ、ここはシェイクスピアの綿密な読み方に感心すべきかも知れない。

さて、シェイクスピアの劇において、コライオリーズとアンシャムの町に関係して、きわめて微妙で、またいかにもシェイクスピアの劇に特徴的な、それ故面白い問題がある。それはコリオレーナスが最後にボルスキー人の暗殺者たちによって倒される場面の場所設定に関してである。もちろん、プルタルコスではコリオラヌスが殺されたのはアンティウムということになっている。しかし、シェイクスピアではそうとは言い切れないようなところがある。というのは、この劇の最終場面にはオーフィディアスの住むアンシャムの町と考えさせる要素の他に、コリオレーナスがかつてボルスキー人たちをなぎ倒したコライオリーズの町と考えさせる要素もあるからである。この両義性は結局のところ、オーフィディアスがコリオレーナスに向かって投げつけた次のような文句に集約されている。

Dost thou think

I'll grace thee with that robbery, thy stolen name

Coriolanus in Corioles?

(5・6・88-90)

この文章の最後の“in Corioles”のところが特に問題で、これのかかり方で、

解釈がふたつに分かれる。つまり、ひとつは上の句読法に素直に従い、“Stolen”の辺に“in Corioles”を結びつけて、「お前がコライオリーズでくすね取ったコリオレーナスという名を私が使ってお前を喜ばすとも思っているのか」というような意味になる。もうひとつは、それを、“I’ll grace thee…Coriolanus”という箇所全体にかけて、「このコライオリーズで私が、お前のくすね取ったコリオレーナスの名を使って、お前を喜ばすとも思っているのか」という解釈である。

もちろん、場面全体にわたって細かく分析していくと、アンシャムと考えるべき材料は厳としてある。まず、オーフィディアスとコリオレーナスの軍隊が発したのはオーフィディアスの居た町アンシャムと考えられるから、それを引き上げる先はやはりアンシャムということになる。事実、「あなた（オーフィディアス）の故郷の町」(Your native town, l. 50) という表現があるし、コリオレーナスの「この地を発した時と変わらず、祖国への愛を忘れて、あなたがたの戦士として戻って来ました」(I am return’d your soldier, /No more infected with my country’s love /Than when I parted hence…, ll. 71~73) という言葉もある。また、その他にも、コリオレーナスは「われわれはローマ人に恥辱的でアンシャム人には名誉の和平を結んできた」(5幕6場 79~81行) とも言っている。もちろん、考えようによっては、これらも絶対的証拠とは言えないが、以上のような根拠から、アンシャム説が妥当性を持つように見えることは否定しようがない。したがってニコラス・ロウが5幕6場をアンシャムに設定して以来、ほとんどの編者がその例にならっているのも当然である。

だが他方、たしかに冷静に分析してみるとこうだが、実際の観客や読者として接した印象は少し違うように思われる。すなわち、一番初めに示したオーフィディアスのせりふあたりから、あたかもコライオリーズに居るかのような感じがしてくるのである。一度は祖国を捨てたはずの男が、それをあと一步のところまで追いつめておきながら、最後には許してしまっている。そうすると今

度はコリオレーナス自身の立場が危うくなり、自分の名前の元となっているコライオリーズでの彼の「働き振り」が自然に思い出されてくるという芳しくない状況が生ずる。その中で先のオーフィディアスの言葉があったわけである。ところがさらに、コリオレーナス自身はこうした状況判断とは無縁の人間であるから、逆上のあまり自らそれを口に出してしまう——「ちゃんと歴史を記録しているなら、私がコライオリーズで鳩小屋に舞降りた驚よろしく、ボルスキー人を蹴散らしたと書いてあるだろう」（4幕6場114～116行）。物事には勢いというものがあるから、観客（または読者）は結局、コリオレーナスがコライオリーズの町で殺されたという印象を持って終わる——と筆者などは考える。また実際、この方がコリオレーナスの死が盛り上がるというものである。

しかし、先程述べたアンシャム説の正当性は残っている。そこでこれをどう考えるべきか。多くの編者たちは、これについて、シェイクスピアは最初はアンシャムのつもりであったが途中からコライオリーズに方向転換してしまったのだという注釈を加えている。⁷⁾ テキスト編集の合理性ということから言えば、5幕6場はアンシャムとせざるを得ないからそうしてあるが、劇の実際から言うとうこうした説明が必要となると言うことであろう。これをもっとおとなしい見方にすれば、場所はあくまでもアンシャムであるが、いつの間にかコライオリーズであるかのような錯覚を持たせるように書いているのだと言うこともできよう。いい加減と言えばいい加減なやり方だが、ここらがテキストを読むのと演劇を観ることの違いの出るところであり、またシェイクスピアの劇らしいところでもあると言えよう。じっさい劇中の人物はこの場面をはっきりアンシャムと特定するような表現はしていないので、劇の流れの中でそれとなく「アンシャムらしさ」から「コライオリーズらしさ」へ力点を移すことはたぶん観客にはっきりした抵抗を感じさせることはないであろう。もちろん、こうしたことを可能にする背景には、シェイクスピア劇の場面は元来、あまり場所を特定して考える必要のない場合が多いということや、そうした場面が比較的スピー

ディに転換するというようなシェイクスピア劇の構造上の特徴があると考えられる。一般に、シェイクスピアという作家は演劇の流れの中で生硬な合理主義などは簡単に飛び越えてしまうようなことが往々にしてあるが、それにしても今回の例は何とも巧妙でまた大胆なものだと思うのである。

(1984年10月)

注

- 1) この都市名については三章で触れる。
- 2) コリオラヌスの伝記を一種の名祖神話のように考える見方もないわけではない。
- 3) もっとも、コリオラヌスは後まで生き残って老年での追放の身の辛さを嘆いたという一説もあることが、リウィウスによって紹介されている。(『ローマ史』第二巻)
- 4) 引用は *The Tudor Translations* シリーズ中、*North's Plutarch* Vol. II (London, 1892), p. 143 より。
- 5) Corioles の他に Coriolus, Corialus, Carioles などが出てくる。
- 6) Aufidius という名前はアミヨの版に由来するが、プルタルコス の諸版には別の形もいくつかある。
- 7) ニュー・アーデン版、ニュー・ケインブリッジ版、ニュー・ペンギン版、その他。